
とあるバカ野郎のラストストーリー

ラヴィスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるバカ野郎のラストストーリー

【Nコード】

N5106Q

【作者名】

ラヴィスタ

【あらすじ】

私はラヴィスタと申します。初めて小説を書きますが、みなさん、どうか温かい目で見守ってやってください。

この小説どこかにいるとあるバカ野郎がいきなり「ラストストーリー」というゲームの世界へ転生する物語です。また現在はまだ確定しておりませんが、もしかするとオリキャラを入れていくかもしれません。とあるバカ野郎がどのように活躍するか楽しみにしてください。

上記のとおり初めて小説を書くので、かなり文に誤字やおかしい部

分が多くあるかと思います。

こんなものよめるか！と思った方は即戻るを押してください。まあ自分なりのペースで更新していこうかと思えますので、どうかみなさんよろしくおねがいします。

とあるバカ野郎のラストストーリー その1（前書き）

あらずじにもあったように、作者はガチで初心者でございます。
また文才もなく、正直に言つと漢字が苦手なので、誤字等かなりあるかもしれません。それをご了承の上、お読みください。よろしくおねがいします。

とあるバカ野郎のラストストーリー その1

俺は工藤筍、普通の学生だ。

あとはゲームバカと友達によく言われてる。

まあ自覚あるんですけどね……。

「やっとクリアしたああああ！」

俺は現在とあるゲームのスタッフロールを見ているわけである。

「いや」しかし、ほとんど2周プレイしたのと変わらないぞ、これ。」

実は、このゲームをやってる最中ほとんど終盤に近いときにゲーム機がぶっ壊れて

ゲームソフトを読み取ってくれなくなり、しかもこのゲームに限ってセーブデータがコピー＆移動ができないもので、

わざわざ新しくゲーム機を買い、再び最初からプレイしたのである。

「でも、結構おもしろかったし損はしてないからいいか！……」

それでも結構夜更かしたな……。もう夜中の5時だ。

……。そこ！夜中じゃないと言っな！

「まあ、もう寝よう。明日は学校だし通学中に事故にでもあったらたまらないしな。」

明日の時間割をあわせて寝る準備が完了したころにはすでに5時半になっていた。

いやあ、やっぱり夜更かしすると目覚めが悪いなあ…………。

ともかく、起こされているのでいつもの挨拶しないとな。

「おはよう、母さん。」

「おはよう……………じゃないわよ！もう何時だと思ってるの！？」

「え？」

そこで俺は枕元にある携帯電話の時間を見た。

「ふむ………8時40分かぁ………なっなんですとおおお

おおおお！？」

。学校の1時間目が始まる時間は8時40分である。つまり……

「遅刻だあああああ！」

「だから早く起きなさいってずっと言ってるじゃないの！」

「だって昨日夜更かししてゲームしてたんだから仕方ないじゃないか！」

まあ言い訳してもあれなんで事実はあるのままだに話してみる。

「夜更かししてゲームするのはいいけど、それで朝に支障がでるのならやめなさいっていつも言ってるじゃないの……。」

いや、まず夜更かししてる所を注意してください、母さん。

「んなことより！着替える！そして学校いく！」

俺は迅速にその場で着替えを済まし、家から飛び出し自転車に乗り学校へ向かった。

「ちょっと！朝ご飯はどうするの！？筍！」

「いらない！そんなもの食べてる暇なんぞあるか！」

朝ご飯のことをそんなもの呼ばわりするのはダメだと思っがこの際気にしないことにした。

「やばいやばいやばいー!」のままで1時間目半分終了するって!」

俺は、これでもか!ってぐらいのスピードで学校に向かった。

まだ学校に着かないしな……！

「やべえ……眠たいでござる……」

昨日の夜更かししたせいかとてつもない眠気が俺を襲う……。

「ん？横からなにか来るな……てオオイ！トラックうつうつ
！？」

あれえー？横を向いたらトラックがものすごいスピードで俺に向かってるよぉ？

バ
ア
ア
ア
ン

次の瞬間俺はとてつもない浮遊感を味わっていた。

「おお・・・俺・・・空飛んでるぜ・・・」

んな呑気なこと言ってる場合じゃないってのは分かってるけど

死の直前になるともつとどうでもいい気がしてきた俺である。

とあるバカ野郎のラストストーリー その1（後書き）

誤字等ありましたら教えてくださると嬉しいです。
感想等も歓迎です。 みなさん、これからよろしくおねがいします。

とあるバカ野郎のラストストーリー その2（前書き）

すみません。物語の設定を決めていたらこのままだと少しおかしい部分がでてきたので急遽内容をいじりました。みなさん、本当迷惑をかけて申し訳ございません。（平成23年1月31日に修正しました。）

えゝ今回もまだラストストーリーの世界には行きません。

・・・・・・・・というより書いていて思ったんですが小説って書くの本当難しいですね。

正直自分には文才など全くっていうほどの皆無ですから、かなりきついです・・・・・・・・。

とあるバカ野郎のラストストーリー その2

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい・・・・・・・・・・きん。」

・・・・・・・・ん？声が聞こえる・・・・・・・・

「おい！起きろ！目を覚ませコノヤロおお！」

「ふんぎゃー..」

次の瞬間俺はものすごい痛みが頭に襲い掛かった。

「いつてええ！！！！・・・あれ？・・・ここは・・・？俺は確か学校に向かっていたはずでは・・・？」

「やっと目が覚めたか。いくらなんでも眠りすぎだ。後、順に答えるがまずここは死と生の狭間、あとお前は交通事故にあってもう死んでるよ。」

あ、やっぱ俺あの事故で死んだのか。

「そうか……。て、あなたはどなたでしょうか？」

目の前にはなんとも偉い人と言っしかないような者が実在している。

普段敬語なんぞあまり使わない俺であるが、こつも明らかに偉い人にみえると

自然と敬語口調になっちまうな。

「俺はゼウスだよ。てか、人じゃなくて神だからな？多分そっちの世界でも聞いたことあるんじゃないか？」

ゼウスって確か神のなかで一番偉いんじゃないか？たけ？俺はその辺の知識は一切備わっていないので分からないのだが。

「ではゼウスさん、なぜ俺はその死と生の狭間に存在しているのでしょうか？あつ、ちなみに俺は工藤筍です。」

「なら筍と呼ぶな。筍、このまま死にたいか？」

おいおい、いきなりものすごい質問してきたな、この神様。

「それは、もちろん死にたくはないですね。まだ人生20年も生きていないのにこのまま死ぬのは正直嫌です。」

「だろーな。……そこでだ！人生よくな生き方していないお前を生き返らせてやる。」

え、マジですか？

「ただし！前の世界と同じ世界はムリだ。もうその世界の住民は
前の死を認識されているからな。そのかわりお前が行きたいと思う
世界があればそこにしてやる。」

・ 確かに一度死んだ人がいきなり生き返ったら大問題だよな・・・

・ てかこれはよく二次創作の小説である転生ができるということか・・・
・ ・・・！？

だとしたらどこの世界にいつかなあ・・・

そつだ！せつかくだし昨日クリアしたゲームの世界に行きたいな！

「それじゃあ……ラストストーリーの世界に行きたいですね。」

「ラストストーリーか！お前いいセンスしてんなあ！俺もあのゲームは面白かった！買った初日にクリアしたなあ。」

ゼウスさんもラストストーリーを知っていたとは……………

それよりもあなたは暇人なんですか？…………いや、この場合は暇神になるのか。

「おい、今失礼なこと考えなかったか？」

「いえ！何にも考えてないですよ！？」

やば。こっちの考えが見抜かれてるって……。

「まあいい、それじゃお前をラストストーリーの世界に送ってやるよ。……と、そうだ。筈、何か力でも物でもほしくないか？」

「まじで？ 転生だけでなくなんか力くれるって……. どんだけサービスいいんだ…….」

「まあせつかくくれるっていうのなら…….」

「じゃあ．．．．．そうだなあ．．．．．まずチートレベルの戦闘力と魔法は使いたいな．．．．．後異邦の力とか．．．．．はさすがに無理かあ．．．．．」

少し欲張りすぎたな．．．．．

「了解。それならお安い御用だ。」

「やっぱ無理ですよなー．．．．．てあれ？できるんですか!？」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってるんだ筈。」

ゼウスさん・・・・・・・・あんた最高だ・・・・・・・・。

「じゃ、せつかくだしあの世界にない魔法を使えるようにしといてやるよ。」

おい、まじか。

「それと戦闘力の話なんだが……そうだな……大胆すぎてよー分からんからテキトウにするな。」

あれ？案外テキトウな部分もあるんだな……。

「お前が細かく言わないからだろ。」

「確かにそうなんですけどね。」

まあ俺自身もよく分からないんだ言葉の表現が……

なんだって俺は国語毎回赤点ギリギリの点数をキープしているほどのレベルだからな！

こういふとき勉強しといたらよかったなーって思うよ本当……。

でも絶対勉強なんてしないんだよな、これが。

「あと、今いった力は転生した直後では使いこなせないものがあるからな？」

ん？どういうことなんでしょう？

「いきなり大きな力を持たせると人間の体がおいつけない。それに人間ってのは案外欲深いんだ。

大抵の人間は大きな力を持つと自分を見失い最終的には自分で自分を滅ぼしてしまうからな。」

なるほど・・・・・・・・・・。すげー納得したよ。

「だから今お前が望んだ力を使いこなすためにはそれ相応の努力や訓練をして得るこつた。

でも中にはその努力に恵まれない奴もいる。だから俺はお前が努力したら必ずその分の努力が

力に変わるようにしてやる。・・・・・・・・・・。まあ大丈夫なものは最初から使えるようにしといてやるけどな。」

ふむ・・・・・・・・・・。理解はできる。

しかし魔法の訓練なんぞどうしたらいいんだ……？

「特に魔法は最初のころは精神力なんてそんなにないから使えないだろう。だがこれについては

時間が自然に過ぎていくだけでも伸びていくだろうから特別な訓練なんか必要ないだろうけどな。」

よかった。それを聞いて安心した。

「んなことより、異邦の力のことだが原作どおりエルザも持つことになるからな？」

「それは分かっていたつもりだけど………なにか問題でも………」

あるとしたら何だ？

「いや、気づいてないだろうし言わないほうがおもしろそうだからあえて何も言わない。後原作ブレイクは余裕でOKだから自由にしてくれ。」

おいおい・・・・・・・・それはいいのか・・・・・・・・？

まあおもしろくなるならそれでいいか。↑バカ

「ものすごく気になるけど・・・・・・・・まあいいか。それよりも原作ブレイクはうれしいです・・・・・・・・あ。」

「ん？どうした匂。」

どうせなら・・・・・・・・そうだな、うんそうしよう。

「ゼウスさん、前の世界で過ごしたの俺の記憶を消すことってできますか？」

あ、ゼウスさんかなり驚いてる。そりゃそうか。

いきなり自分の記憶を消せますか、なんて質問普通しないよな。

「……そりやできないことはないぞ？しかしなんでいきなりそんなことを聴くんのだ？」

予想してた通りの言葉が返ってきたな！。

「いや、どうせゲームの世界とか行くなら、俺の記憶を消してゲームのことを忘れてその世界で過ごすほうがよりリアル感を味わえるのではないかと思ひまして……」

「ふむ……。なるほどなあ……。」

あゝやっぱこついつのは無理なんだろうかな？

と思いきや次の瞬間ゼウスさんは俺が考えていることと真逆の方向の返事が返ってきた。

「いいな！それ！いやゝよく思いついたもんだな。俺がやりたいぐらいだよそれ。」

……マジカヨ……。

……なんかこの神様とてつもなく人間に近いよな……
なんか……。

「気にするな。それが俺クオリティーだ。」

今、神様らしくない発言が……。いや、やめよう。これ以上の詮索は俺の身が持たない気がする。

「そうそう。人間素直が一番だつて。それで、他に何か必要なものはないか？」

他にかぁー・・・・・・・・あっそうだ。ついでにこれも頼めるかな？

「普段俺が使ってる携帯とイヤホンもって行きたいけど・・・・・・・・。」

「ん？なるほど、音楽を聴くためにか。それぐらいならぜんぜん平気だろうが、携帯の電池とかはどうするんだ？」

「おいおい、今ので俺が音楽聴くために持っていくって分かるのかよ。
・・・・・・・・って普通に分かるか、冷静に考えれば。」

「電池は気にしなくても太陽で充電できる携帯だから大丈夫。」

何気に俺の携帯は太陽で充電できる上に防水機能つきだからな！。

「なら安心か。他には何か？」

他には、特には必要はないな。

・・・で、これは聴かないとやばいだろうさすがに。

「特に必要じゃないけど、向こうの世界に行ったとき俺の記憶がな

くてもエルザたちに会えるのか？お金とかもないと困るし。」

なんだかんだでこれが一番重要な気がする。

もし、エルザたちと会えないと物語に関わっていけないし、お金ないと向こうの世界で暮らせていけないだろ……。

「ああ、その点は安心しろ。お金はある程度もたせておくし、エルザたちとは会えるように俺が仕組んでおくから大丈夫だ。」

俺の心配は無駄だったようですね。

「それを聴いて安心しました。他には特に必要だと感じるものはないですね。」

「そうか、まあある程度の装備も渡しておいておくよ。……
……というかどうせだから武器もどっか別の世界のものにとくか。神話の武器でも……。。」

ん？今最後なんて言ったか聞き取れなかったぞ。……ま
あいいか。

「あ、後前の世界での記憶は消してほしいのですが、ここでの出来事の記憶は残してもらえませんが？
あと基礎知識も。」

正直前の世界の記憶は消してほしいが生きていくための知識までは
わすれたくないし、

なによりここでの出来事を覚えておかないと自分が何者なのか完全
に分からなくなるしな。

「はいよ。まあ当然のことっていったら当然のことだな。」

「ごもつともですね。」

「本当ありがとうございます。ゼウスさん。」

「いやいや、いいよ別にこれくらい。あ、後これからは俺のことはゼウスって呼べよ。じゃ、筈！がんばってこいよ！」

「了解です。……………つてオオオオオオオオオイイトイ
イイイイ！」

ゼウスさんがしゃべり終わったあといきなり俺の足元が穴開けやがった！

うわあああああ

こうして俺はラストストーリーの世界へ向かうことになった。

ゼウス side

いや、やっぱり人間を転生させるって本当はまるな、これ。

それにあいつとは気があいそうだ。

ゲーム好きな人間に悪い奴はいないだろう。基本。

てか俺がそう思いこんだだけだと言われたらそこまでけどな。

「……………しかし、異邦の力を望むとはな……………俺が何もしなくても必然にエルザたちとあえるだろ。もう原作にはなかったものが存在することになるだろうな。筈以外にも。」

よーはあいつというイレギュラーな存在によってあの世界の秩序にも影響がでるだろうからな……

「ま、本当にやばいときは俺がサポートしてやるし、なにより筍なら大丈夫だな。」

あいつならきつとやっていけるだろう。

「がんばれよ……。筍。」

ゼウス side out

とあるバカ野郎のラストストーリー その2（後書き）

・・・・えーと、自分でも正直これでよかったのか分かりませんが、

これからがんばっていいのかなと思いますので、みなさんどうか
よろしく願います。

誤字等ありましたら教えてください。感想等もお待ちしております。

とあるバカ野郎のラストストーリー オリキャラ設定（前書き）

平成23年2月6日修正をしました
今回はキャラ設定を書いてみました。

まだまだ不完全な気もしますが暖かい目でみてやってください。お願いします。

とあるバカ野郎のラストストーリー オリキャラ設定

前書きにもあるように、今回はキャラ設定を書いてみました。

もしかしたら小説を書いてるなかで、（ご都合主義のため）いきなり変更になったりするかもしれませんが、そこはご了承ください。

ではどうぞ。

名前：工藤筍（くどうしゅん）（雰囲気を出すためにラストストーリーの世界ではシユンと呼ばせます。）

性別：男性

年齢：17歳

見た目

顔つきは、はっきり言ってイケメン。

髪は濃い青色で長さは後ろ髪が肩につくつかないぐらい。それ以外はいたって普通。

目は赤色。青い服の上に黒に薄い青を混ぜたような色のコートを着ている。スボンも同じ色で長ズボン。

いつもイヤホンを付けており音楽を聴いている。

身長：188cm

体重：70kg

性格

普段は自分勝手な行動が多々。でも仲間のことを思いやれる優しい心の持ち主。

また、自分の本来の力はギリギリになるまで他人だけでなく仲間の目の前でも使うことはない。

力振りかざすことが嫌いな人間でもある。逆にいうと、力を隠すことも好きな人間である。

魔法属性：雷

魔法の詳細

サンダークロス

自分の手から雷を相手に向かって発生させる魔法。

また、敵に当たるまで自分の意思で雷の向きを操ることができる。

よって前方の敵や障害物が邪魔でも後方の敵に当てることができる。応用するとかかなり便利な魔法となる。ただし長時間操るのには多大な精神力が必要。

サンダーマイン

雷の塊を創造し、その場に置くことができる。

創造者以外の誰かが近づくと、塊からその相手に向かい雷が発生する。

また、別の魔法を当てることによって任意に発動させることも可能。詠唱時間が長ければ長いほどより大きな効果を持つものが創造できる。

サンダーサークル

雷属性の魔法を使用するとできるサークル。

シユンは風魔法を使用できないため、ウインドによる効果を自分だけで使うことは不可。

サークル上では武器に雷の効果を与え相手に攻撃すると一定時間攻撃不可にする。

ウインドで拡散させると周りの敵全員を感電させ一定時間攻撃と移動を不可にする。

その他の魔法はまだ秘密です。

ちなみに、転生直後では精神力が低いいため、魔法を使えません。

武器

デュランドル（ローランの歌 より）

シャルルマーニュの12勇士の1人ローランが使っていたとされる剣。

名匠の鍛えた業物であり、強靱かつ鋭い切れ味で、どんな防具もひとたまりもないという。

縞大理石に数度きりつけてもその刃は欠けることがなかったという伝承もある。

形状はロングソード。

技

破魔・光雷閃

自分の雷を武器に蓄積させ、そのまま突くことにより剣の斬れ味を利用した雷の閃光を直線上に放つ技。

剣の斬れ味を利用しているので体だけでなく大抵の武器や防具をも貫く力をもつ。

また、雷を蓄積させるため、デュランドル以外の剣ではその雷を収まりきれないので使用不可。

ただし、この技を使うためにはかなりの時間を必要とする。（雷を蓄積させるための時間）

その他の技もまだ秘密です。

これも同様、魔法が扱えないので、転生直後には使えません。

身体能力

これについてはゼウスの力により、人間の最大限の能力を・時間経過で少しずつ・引き出せるようになっていく。

なので転生直後の最初では普通の人と変わらない能力である。

それ以外の特殊能力

異邦の力

エルザと同様、異邦の力を扱うことができる。ですが転生した直後は持っていません。

千里眼

とてつもない視力でかなり遠くの物まで見える。

急呼・消失

ゼウスの力により手と手をあわせるだけで手から剣が出現。

また、剣をしまうときは手と手を再びあわせることで剣を消すことができる。

剣術

これもゼウスの力により極限の域の剣術を扱うことが可能になった。ただし、努力をしない限りは素人同然の力しかを引き出せないとのこと。

別の世界の剣の技も訓練すれば可能。しかしその場合は、本来その技で出せる力の1/10でもない。

殺気

相手に対してものすごい殺気をぶつけ、相手の本来の力を出せなくする。

ただし、一定以上の強者に対しては効果はない。

また、シュンはこの能力をあまり好まない上に使わない。

魅力

初見だけで、その見た目からあらゆる者から好かれる。

ただし、中には逆効果の人間も……？

（歌仙の「魅了」とは別物です。）

鈍感

恋愛については鈍感である。

なぜかこの能力はゼウスでも解除できなかったらしい……？

とまあ……こんな感じですね……。

物語の設定としては、ゲームの話の序盤ごろになったら上記に書いてある能力を使いこなせるようになる予定です。

ちなみに音楽を聴きながら戦ったりさせる予定です。

あまり必要ない要素かな？と思いましたがあってもなくても不便ではないならいつそありで、みたいな感じです。

とりあえず、魔法や技については自分で考えたものなのでもしかしたら理解しにくいかもしれません。

あと、公式の方でエルザの年齢が決まっていなかったんですが、一応シユンとは同じ年って設定でお願いします。

そして・・・大変申し訳ございませんが、これ書いてる時に思ったのですがもしかしたら原作ブレイクにならないかもです。確かに別の意味では原作ブレイクします。

最初にかいてあったようにもしかしたら急遽、変更があるかもしれません。

これからもししく願います。

とあるバカ野郎のラストストーリー オリキャラ設定（後書き）

あと、次の更新がもしかすると来週以降になるかもしれません。
リアルの方で用事がたくさん？あるのでこちらに手を回せません。

誤字等あればご指摘ください。感想等もお待ちしております。

とあるバカ野郎のラストストーリー その3（前書き）

とあるバカ野郎のラストストーリー その2 を1月31日に修正しているの

それ以前に読んでいる方はもう一度読み直してください。お手をかけまして本当すいません。

とりあえず暇がなんとかあったので上げました。

えーと、自分でもこういう展開でいいのかもすごく不安ですが、自分は文才ないので行き当たりばったりでどうかしよう！と開き直りました。

なので、かなりの駄文な仕上がりになってるかと思います。不愉快に感じたりしたら

即戻るをおしたりして読むことを中断することをお勧めします。

とあるバカ野郎のラストストーリー その3

ゼウスによりラストストーリーの世界へ転生した旬。今頃何をしているのだろうか？

それではどうぞ。

「オギヤーオギヤー」

おい・・・転生するとは聴いていたが・・・

まさか赤ちゃんから人生を歩み始めることになるとは思わなかったぞゼウス。

「わりいわりい。言い忘れてた。まあいいだろう？その分人生楽しめるのだから。」

それに今のお前には前の世界の記憶がないのだからもう一回ぐらい親にきちんと育ててもらってもいいだろう？」

な！？

いきなりゼウスの声が頭の中に響いてくるのだが。

「驚かせてしまったらしいな。すまんすまん。」

さすが神というべきなのか？

常識というものが通じないよな、本当。

「うんなことより、お前の新しい両親の顔でもちゃんと見ておけ。これから世話になるんだぞ?」

ああ、そうする。

「じゃまた用があるとき話かけてくれ。」

そういうとゼウスの声が聞こえなくなった。

そして・・・。

「大切に育てていきましょうね、あなた。」

今しゃべったのは俺の母なのだろうが・・・

すっげー美人です。

「ああそつだな、たっぷり愛情込めて育ててやろう。」

で、こっちが俺の父なのだろうが……

すっげーイケメンです。

・・・て、おい。俺の両親やばいだろ。

まるで絵に描いたようなカップルですよ。

よくまあこんな両親のもとで俺産まれたな。

「オギャー！オギャー！」

しかも俺は今泣くことしかできん。

赤ちゃんだからか？

くそ、基礎知識あるのに話せないとか・・・

これはいろんな意味で恥ずかしいぞ。

「にしても本当元気な男の子ですね。」

ん？こちらの方は一体……？

「俺たちの子供なんだから当たり前だろ。なあクイ。」

「ええ。でも、カイさんがいなかったら無事に産まれることもなかったかもしれないのよあなた。」

この人はカイというのか。

無事に産まれたというと難産とかだったのかな？

どちらにせよ本当感謝しないとな。こつして俺を無事に産んでくれたことを。

あとあのカイっていう人にも。

「ああ、分かっているとも。カイ、本当にありがとう。おかげで我が子もこうして無事に産まれた。」

と父は言つと頭を深く下げた。

「いえいえ、私にできることなんて本当限られているのですから。これぐらい当然です。ほら、顔を上げてくださいサールスさん。」

と、言われると父は顔をあげた。

「お二人にとって今日はめでたい日なんですから。お礼をするのならまた今度、日を改めましょう。ですがそれよりも今はやるべきことがあるでしょう?。」

?なんだろやるべきことって。

「!そうだな我が子の名前を早く決めないとな!クイ名前もつ決めてるのか?。」

そっいえば俺まだ名前づけられてなかったな。

前の世界での名前があるから全然気づかなかった。

「そうね…………。男の子だしシュン…………。てのはどう？あな た。」

！まさか前の世界と同じ名前を呼ばれるとは思わなかった。

「ふむ…………。シュンか…………。いい名だな、それにしよう！」

これも運命なのか？前の世界と同じ名前か……。

いや、別に嫌なわけじゃないけど。なんか照れくさいな。

「では私は家に帰りますね。今日はゆっくり休んでください。クイさん。サールスさん。」

「本当、ありがとね。カイさん。」

「またお礼するぞ。カイ。」

「それでは楽しみにしてますね。では。」

カイさんは家に戻っていった。

「……本当あの旅人さんはいい人よね。」

「ああ、全くだ。」

カイさんは旅人なのか？

まあそれでも命の恩人にならないのだろうか。

「でも……この島に来る人なんてもう何十年もいなかったの
に……」

「まあな．．．だが大丈夫だろう。カイならこの島のことを他の人に話たりしないだろう。」

？

「一族のみんなから信頼されているんだ。何も心配することはないだろう。」

「．．．．．そうね。あの人なら大丈夫よね。」

「大丈夫だつて。そんな無駄な心配をするより今日はゆっくり休め。みんなにはまた明日にでも伝えればいいだろう。」

「ええ。そうするわ。」

本当に仲のいい二人だよな。

「そして……これからよろしく。シュン。」

やべえ……不意に言われたからってのもあるがすごい照れるぞ。これ。

だが話すことができなくても想うことはできるんだ。だからきちんと挨拶かえさなきゃな。

こちらこそよろしくお願いします。母さん。父さん。

こうして俺は新たな人生を歩み始めるのであった。

とあるバカ野郎のラストストーリー その3（後書き）

・・・本当こんな展開でよかったのだろうか？

誤字等ありましたらご報告お願いします。

とあるバカ野郎のラストストーリー その4（前書き）

今回も駄文中の駄文の上に駄作中の駄作でございます。

読んでいてもわけ分からないところもあるかもしれませんが、皆さんどうかよろしく願います。

ではござ。

とあるバカ野郎のラストストーリー その4

現在俺が産まれた日から二日後。

そしてその間分かったことといえばやはり母さんは難産だったらしい。

そこで旅人であるカイさんが医師の経験があり何とかなったんだとか。

そこまで詳しいことは分らんが、カイさんは命の恩人といってもいいな、本当。

そして現在。

外はお祭り騒ぎになっていた。

で、俺は母さんに抱かれた状態で両親と一緒に祭りが行われている場所に向かっているのだが。

……にしても大きな島であるとおもっ。今の俺にはよく分かんが現在家族で海辺を歩いているわけでありまして。

首だけ動かして周りの情景を見る限り端がみえない。

と、呑気なこと考えてたら祭りのところまで着いた。

するといきなり人に囲まれた。

「「「「おめでと〜ございます！サールスさん！」「」

「「「「おめでと〜ございます！クイさん！」「」

そう。この祭りは俺が産まれたことを祝福するためにやっているだとか。

なんだって人ひとり産まれただけでこ〜もお祭り騒ぎになっているんだ？

うゝん分からん。

「いやいや。これもみんなが支えてくれたから無事に出産することができたんだ。お礼は本当はこっちが言うべきなんだぞ？」

と父は言うが、

「何を言ってるんですか！いつも私たちがサールスさんのお世話になってるというのに！」

それを妨げるかのような大声で父さんの言うことを否定した。

「・・・・・・・・俺そんなにみんなに何かしたっけ？」

「たくさんありますよ！？私の子供が森の中で迷子になったときすぐさま探しに行って見つけてくださいました！」

「私のところでは夫の病気を治すための薬の材料と一緒に探してもらったり！」

「僕のところでなんかは家を作るのに材料が足りないって言ったら一目散に材料を集めてもらいましたよ！」

おい、家の材料って……。

まあ島だと材料を集めるだけでも大変なのかな？

その他もろもろ一族の人たちも父さんにいろいろと助けてもらったりするらしい。

「私もこの島にやってきたときに一族のみなさんを説得して下さったのもサールスさんでしたよ？」

あ、カイさんいたのか。

全く気づけなかった。

「カイさん！何時の間にこちらに？」

と母さんが尋ねた。

よかった俺だけじゃなかったんだな、気づいてなかったの。

・・・というかここにいる人全員気づいてなかったみたい。

他の人も驚いた顔してる。

「いえいえ、今さっき来たばかりですよ。それよりもサールスさんは本当無自覚すぎます。」

「そうとはいっけどな。そんなことしたっけなー？全く覚えてないんだが。」

そして覚えてないっていうな……。

本当に無自覚でしてるんだろうな、本能的に困ってる人をほっとけない性格なんだろう。

お人よしすぎるだろ……。

「本当あなたは自覚がないのですね。」

「いや、本当俺何もしないだろ？」

「・・・ふふ。まあそういう所が私が惚れた部分ですからね。」

なるほどな！。

確かにイケメンでこんな性格なら女性だと誰でも惚れてしまうと思うな。

「ん？何か言ったか？クイ。」

「いえ、何もありませんよ？」

に、しても本当ラブラブだな、父さんと母さんは。

この二人のもとで産まれた子供としてちゃんとやっていけないとな。

まさかそんなことはないと思うけど俺のせいでこの幸せな空間を崩
してしまつては後先経たない。

「うむ。クイにサールスよ今日の祭りきちんと楽しんでおるか？」

ん？向こうから少し派手な男性がやってきた。

「あ、はい族長。これでもか！つてぐらい楽しませてもらってます。なあクイ？」

あー族長なのか。

て！族長にしては若そうなんだが……。見た目以上に年寄りなのかな？

「ええ、本当ありがとございます。ラダ様わざわざこんなお祭りを開催してもらって。」

俺もそれと思う。

なぜかって言うと、現在目の前で踊ってる人たちもそうだけど、みんなどうやら今日という日のために何かしら出し物を準備しているらしい。

それだけでなく周りにある飾り物？がものすごくきれいだ。

花火も上がってる。

本当にどんだけ盛大な祭りをしているんだ。

「なに。遠慮なんぞしてはいかんぞ。それに一族で一番の最強であるサールスと一族で一番の美貌をもつクイの子供じゃ。なおさらこれぐらいの歓迎はしないと族長としてのケジメがつかんだろ。」

ああ、なるほど。俺が最初に抱いていた疑問の答えはそれか。

にしても……………。へー、父さんはこの一族で一番つよいのか。

そして母さんも一族つてどれぐらいいるのか現在赤子である俺の視界では把握しきれないがすごいよな！。

……………本当俺とんでもない両親をもったな。

「そんなもんなんですかね？」

「そんなもんじゃ。」

しかしこうして見ると本当父さんは一族のみんなに誇られているよな。

父さんに恥欠かせないために俺もがんばらないとだな！

「オギヤーオギヤー！」

・・・て今はしゃべれないんだった。忘れてたよ。

「しかし本当元気な赤子のお。さすがサールスの子と言っべきか。」

「やめてくださいよ族長。照れるじゃないですか。」

「ハッハッハ。いつも謙遜しておるからな。たまにはいいじやろ?。」

「謙遜なんかしてませんって!それに族長!いつも言っています
が俺と2歳しか変わらないのにその話し方はどうかと思いますよ?。」

まじで！？まあたしかに父さんとそこまで年は変わらないなーとは思ったが族長ってそんな年でもなれるものなのか！？

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ善処はしているつもりだよ。」

なんだろ今の間。絶対善処してないと思うな。

「にしてもこの子の将来が楽しみですね？クイさん、サールスさん。」

カイさん、本当にありがとうございます。

もしかしたらこの人がいなかったら俺死んでたかもだしな。

「カイ、当たり前なこと聴くなよ。なあクイ？」

「はい。本当これからが楽しみです。」

「よし！みなものよ！サールスとクイの子の誕生を祝して今日は盛大に盛り上がろうじゃないか！」

と、族長が一族みんなに聞こえるような声で言った。

「
「
「
「
はい!
「
「
「
「

・
・
・
・
・
一瞬耳が引きちぎれるかと思うほどの返事をきいた。

ここの人たちはみんな暖かい人なんだろうな、
とそう思った一日であつた。

とあるバカ野郎のラストストーリー その4（後書き）

．．．．いやはや本当に駄文だな。

黒鋼さん前回感想&ご指摘くださりありがとうございます！
これからも暇なときでいいのでこんな駄文ですが読んでやってください。

誤字や感想等お待ちしております。アドバイスもできれば！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5106q/>

とあるバカ野郎のラストストーリー

2011年3月18日13時42分発行